

## 外遊随想 — ヨーロッパを訪ねて —

友 野 隆 \*

昨年秋、ヨーロッパのごみ事情視察のため、ドイツ、スイス、オランダ、イギリス、フランスの各国を訪ねました。わずか2週間の日程で、5ヶ国ものごみの山をめがけて走り廻ったわけで、ヨーロッパを見る暇は殆んど無かったのですが、細川副理事長から、何か書けということでしたので、重たいペンを執ってみました。

ヨーロッパを廻ってみて、先ずしみじみと感じましたことは、何と緑の多いことかということでした。広大な平地のなかで、古い歴史をすっぽりと包みこんだ緑。札幌市と姉妹都市である130万人の人口を擁するミュンヘン市では、300Km<sup>2</sup>の面積のうち、半分が緑地帯との由。可住面積が少ない我が国においては、到底及びもつかないことなのでしょう。もう少し徹底した都市計画で、私どもの日常生活のなかで目にふれることのできる木木の緑を、もっと増やしてもらいたいものです。

それから、意外に感じましたことは、夜の街の質素さでした。

ロンドンからパリへの移動が、イギリス航空の恒例と云われるストの影響で夜になってしまったのですが、おかげでパリの夜景を上空から一望できる機会に恵まれました。夜行便で東京の上空を飛びますときのネオンの輝きに比して、花の都パリのそれは如何ばかりかと、実は少々目をこらして窓辺に身体を寄

せていたのです。ところがどうでしょう。ロンドンを発って30分ばかりで着陸しようとしている足下の街のあかりの何と寒々としたことか。フライトの時間があまりにも短かったこともあって、何処か途中の空港に寄ったのかと思えた程のパリの夜景。市街地に足を踏み入れてもやはりそうでした。他の国々の都会の夜景も同様です。けばけばしいネオンの光があまり目につかないのです。博多の中洲の川のほとりで夜を徹してチカチカと明滅する巨大なネオンの群。それがないのです。自分の店の屋根に限って、質素なあかりを申しわけ程度に燈しているといった感じです。夜の大都会のあちこちに散在する荘厳な照明に照らし出された歴史的遺産である巨大な石の建造物の静かなたたずまいと見事に調和した、すばらしい演出だとも受けとれるような光景でした。

アウトバーン等道路沿いに野立看板が全く見受けられないのも見事です。

我が国でも、けばけばしいネオンや巨大な野立看板など、そろそろ止めにするようにしたらどんなものでしょうか。

それから、驚きましたのは、日本人旅行者とロンドンにおける空き貸しビルのおびただしさでした。

国際収支の赤字に苦しんでいる西欧諸国における大巾黒字国日本人観光客のおびただしさと日本製品の氾濫については、新聞等で一

\* 福岡県環境整備局長（現在 教育委員会次長）

応承知はしていましたものの、現地を訪ねてみますと想像以上のものがありました。

主だった観光名所に横づけされる大型バスから次々に吐き出される日本人の群。ショーウィンドを埋めている日本製カメラと時計。一昔前なら国威の発揚といった感にふけり、胸を張ったところでしょうが、一瞬、目をそらしたくなるような感情に襲われたのは、今日、我が国を襲っている経済の低成長化と国際収支の大巾黒字批判のなせるわざだったのでしょうか。

「ロンドンの昏れ」についても、新聞やエッセイを通じて承知していましたものの、相当に深刻なものようです。ロンドン市内を廻ってみますと、やたらと目につく大通りのビル街の窓に掲げられている貸部屋のあることを示す「to let」の看板。ピカデリーサーカスの路上のごみのおびただしさ、地下鉄内の不潔さとともに強く印象づけられたロンドンの風景でした。

それから、困りましたのは、土曜日の午後と日曜日には、お店が開いていなかったことです。デパートも専門店も一部飲食店を除いては皆んなお休みです。

ヨーロッパの人達は、家族そろってのショッピングの楽しみは一体、何曜日に味わっているのでしょうか。

私の渡欧の目的は、ヨーロッパのごみ視察ですから、平日は早朝から夕方までごみのなかです。視察団々長を仰せつかっている手前もあり、視察をぬけ出してショッピングというわけにも参りません。ごみを被ってホテルにたどり着くのが夕方6時頃。平日でも、お店はもう完全に閉店です。初めての渡欧でもあり、先輩のサゼッションもあってノートには買物予定メモが並んでいます。銭別を下さったかたがたには「渡欧の証明」も必要です。しかし、私が買物が出来る時間帯には、ヨー

ロッパは店を開いてくれなかったのです。結局、私用の買物は殆んど出来ないまま。「渡欧の証明」は、帰国途中の寄港地アンカレッジで、1時間足らずの間であわただしく買入れる始末になってしまいました。おかげで、羽田通関では、ありのままの申告——当然のことですが——で無税。税関吏が、各国のごみの資料ではち切れそうになった私のカバンを、前の人の執ようにほじくり廻わして検査したのとは違って、ポンと叩いただけで開けてもみなかったのには、何故だか、いささかがっかりしたような次第でした。

苦労しましたのがお金の勘定。マルク、ペニー、スイスフラン、ラッペン、ギルダ、フローリン、ポンド、ペンス、フラン等。

何しろつぎつぎに国を変えるわけですから大変です。お金の種類と価値を覚えましても、3日たつともう通用しません。そこで、いちいちの計算がめんどろなので支払い——殆んどがワイン代かビール代。と書きますと如何にも私が酒豪のようにお感じになるかもしれませんが、先にも書きましたように、お金が使える処は飲み屋しか開いてなかったこと、食事の際、お茶は勿論水も出ないので、何か飲むとすれば、ミネラルウォーターを買うより、ビールかワインの方が割り安のような気がしたこと等によるものです。——は、殆んどの場合、一寸大きめのお札。その都度、硬貨のおつりがどっさり。おかげで、ホテルの枕銭、トイレのチップ——何れも100円程度——の支払いには不自由しませんでした。弱ったことには、出入国の際、硬貨の交換をやってくれません。そこで、今でも私の机のなかには各国の小銭が一杯。経済のためには、やはり、もっと頭を使うべきだったと反省している次第です。

ところで——と開き直るほど紙数が残っているわけではありませんが、ごみの話を一寸。



ヨーロッパでは、ごみを資源として活用している処が多いようです。ごみの焼却熱を利用した発電やコンポスト（肥料）製造が盛んに行われています。我が国でも、福岡市の東部清掃工場のように焼却熱利用による自家発電施設を持った焼却場はありますが、「ココワ、ゴミヤキバデワナイ。ハッデンショデアル。」と言って、不足する燃料（ごみ）を他都市から購入して発電し、都市電力に供給しているような処はないようです。余剰蒸気を都市暖房に供給したり、蒸溜水を製造して工場に売却したりしている処もあります。

コンポスティングも至る処で見られます。ヨーロッパでは、都市近郊に連なる広大な牧草地やブドー園などで、コンポストに対する需要が旺盛なようです。

ミュンヘン市では、郊外で生ごみの埋立てが行われていました。ごみで平地に65mの山を作り、表面を2m覆土したうえ緑化するのだそうです。ミュンヘン市では、周辺に山がないため、ごみの山が景観を良くし、冬はスキー場——平均積雪80cm——になるというので、市民はその完成を楽しみに待っているとのことでした。

このように、ヨーロッパのあちこちで見られるごみの再資源化。我が国でも、もっと、家庭における金属、ガラス、プラスチック等ごみ選別の徹底と、台所生ごみの十分な水切り——水分が多いと燃焼効率が悪いのです。——の協力等と相いまって、ごみの有効利用を考えてみたらどうでしょうか。

（文献紹介）

## 東京都のゴミ処理費用

廃棄物 4(1)1978. P107

東京都では52年に東京湾の中央防波堤外側の埋立地にゴミの搬入が開始され、また都内11番目の清掃工場が足立に完成した。

この埋立処分地の建設費は450億円、足

立工場の建設費は185億円を要した。

現在、東京都全体で1日1万7千トンのゴミを処理しており、その処理費は、1日2億6700万円を要している。